

夕焼けがうすれて

小川未明

青空文庫

汽笛きてきが鳴なつて、工場こうじようの門もんをでるころには、日ひは西にしの山やまへ入はい

るのであります。ふと、達夫たつおは歩あるきながら、

「僕ぼくのお父とうさんは、もう帰かえつてこないのだ。」と、頭あたまにこんなこ

とが思おもい浮うかぶと、いつしかみんなからおくれて、自分じぶんは、ひと

りぼんやりと、橋はしの上うえに立たつていました。

もはや通とおる人ひともありません。水みずは海うみの方ほうへ向むかつて流ながれていま

す。広こう告こく燈とうの赤あかい光ひかりが、川かわ水みずのおもてに映うつつていました。

「いつか、お父とうさんうみに海うみへつれていつてもらつた。帰かえりは、暗くらく

なつた。そして、電でん車しゃの窓まどから、あの広こう告こく燈とうが見みえたつけ、

あのときは楽たのしかつたなあ。」

学生服がくせいふくを着た少年しょうねんの目めから、熱い涙あつなみだがながれました。つねに彼はかれほがらかだったのです。お父さんとうは、お国のために戦たたかつて、死しんだのだ。そして英霊えいれいは永えい久きゅうに生きていて、自分じぶんたちを見守みまもつていてくださるのだ。だからさびしくないと信しんじていたのです。しかるに、どうしたのか、今日きょうは、ばかにお父さんとうのことが思おもい出だされてなつかしかったのです。

「もし、生いきていらして、あの小山こやまくんのお父さんとうみたいに、凱が旋いせんなさつたらなあ。」と、考かんがえると、思おもつただけで、飛とびたつような気きがしました。

ちようど、このとき、灰色はいいろの影かげが、銃じゅうをかついで、あちらから橋はしを渡わたつて、足音あしおとをたてずに、きかかりました。

「あつ、お父さんでないか。」

達夫は、目をみはりました。たとい、幽霊でも、お父さんだつたら抱きつこうと待っている、それは、釣りざおをかついで、どこかの人がつかれた足を引きずりながらくるのでした。

「駅へは、まだ遠うございますか。」と、その人が、たずねました。

「この町をまつすぐにいって、つき当たるとじきです。」と、達夫は、おしえました。

ぶどう色に空は暮れて、ボーウと、サイレンが鳴りひびきました。これから、工場では、夜業がはじまるのです。

「非常時のことで、仕事が忙しくなりました。体が強健で、

希望の方は、奮つて居残つてもらいたい。」と工場長のい
つた言葉が、達夫の耳に、はつきりとよみがえりました。
同時に、彼は、戦時日本の勇敢な少年工であつたので
す。急に、彼の足には力が入つたし、両方の腕は、堅くなり
ました。町へ入ると、ラジオの愛馬進軍歌がきこえてきました。
彼は、いつものごとくほがらかで、口笛をそれに合わして、家
に帰るべく駅の方へ歩いていました。

「ああ、おそくなつた。」

電車に乗つて、腰を下ろすと、ひとり言をしました。外は暗
くなつて、ただ町の燈火が星のように、きらきらしているばかり
です。彼は、いつも帰る時分に、晴れた空にくつきりと浮かび出

た、こつきよう 国境の山々の姿を見るのが、なによりの楽しみだつた
 のです。ひと 人のめつたにいけない せいじよう 清浄な山の頂や、そこに生え
 て、かぜ 風に吹かれています はやしけしき 林の景色などを考えるだけでも、一日の疲
 れを忘れるわす ような気がしました。そして、お父さんのとう 靈魂は、
 きつとあんなような清らかなところに住んでいらつしやるのだろ
 うと思つたのでした。それが、もうおそくなつて、山が見えない
 のは残念ざんねん です。

じつと、あかり 燈火を見ているうちに、家うちで自分の帰るのを待つてい
 るお母さんの姿すがたが浮かびました。

「そうだ、僕ぼくは強くなるのだ。そして、お母さんの力ちからにならな
 ければ。」

彼は、きつとして、頭を上げました。

その翌日の晩のことです。

お母さんは、夕飯の用意をして、おなかをすかして帰ってくる息子を待つていられました。自分にはなくても、子供には、ベつに滋養になりそうなお肴がついています。

「どうしたんでしようね。いつも、いまごろは帰ってくるのに。」
と、お母さんは、時計を見上げていられました。どうしたのか、達夫は、いつになく帰りがおそかったのです。

「お母さん。おそくなつても、心配しなくていいよ。」と、出がけにいった、わが子の言葉が思い出されました。けれど、帰る時刻のきまつているのに、こうおそいはずがない。なにかまちが

いがあったのでなければいいかと、お母^{かあ}さんは心配^{しんぱい}しました。

「機械^{きかい}にふれて、けがをしたのではないかしらん。」

あれほど、気^きをつけるようにと、日^ひごろいつているけれど、どんなことで、あやまちがないともかぎらない。会社^{かいしゃ}へ電話^{でんわ}をかけてみようか、電話^{でんわ}の番号^{ばんごう}をよくきいておけばよかったと、お母^{かあ}さんは、気^きをもんでいられました。

そのうちにも、時計^{とけい}の針^{はり}はこくこくとたつていったのです。いつも帰^{かえ}る時間^{じかん}より一時間^{じかん}、二時間^{じかん}、二時間^{じかん}半^{はん}と過^すぎてしまったのです。

「あの子^こにかぎって、だまって、ほかへ遊^{あそ}びに行くようなことはない。」

そう思うと、お母さんは、こうして、じつとしていることができませんでした。

暗い道を、お母さんは、停車場の方へ向かって歩いていました。おそらく、途中で息子に出あうであろうと思われたので、あちらから、足音がすると、立ち止まって、その人の近づくのを待つていました。見ると、ちがっています。またすこしいくと、こちらへくるくつ音がしました。

「あの足音こそ、たしかに達夫のようだ。」

お母さんは、闇をすかして、見のがすまいとしました。ちやうど、年ごろから、脊の高さまで、そっくり同じだったので、「達夫じゃない？」と、お母さんは、声をかけました。しかし、

ちがつていたとみえて、その少年しょうねんは、だまつていつてしま
 ました。道の曲まがり角かどに、肉屋にくやがあつて、燈火あかりが明るく往來おうらいへ
 さしています。お母かあさんは、しばらくそこに立たつていました。あ
 とから、あとから、勤めつとから帰かえるらしい人影ひとかげが、前まえをすぎてい
 きました。

「まだ、こうして、みなさんが、お帰かえりなさるのだもの、そんな
 に心配しんぱいすることはない。」お母かあさんは、みずから、氣持きもちちを休やす
 めようとししました。けれども、こうしてみなさんが家うちへ急いそいで帰かえ
 られるのに、いつも早く帰かえる我わが子こが、どこにどうしているだろ
 うと思おもうと、またしても氣きをもまずにはいられなかつたのであり
 ます。お母かあさんは、とうとう、駅えきの前まえまできてしまいました。

ゴウ、ゴウ、と、ひびきをたて、電車でんしゃがホームへ入ると、ま
 もなく、どやどやと階段かいだんを降りて、人々ひとびとが先を争つて、改
 つぐち 札口せとから外へ出てきました。中なかには、大人おとなにまじって、達夫たつおぐ
 らいの少しょうねん年もありました。片手かたてに弁当箱べんとうばこと書物しょもつを抱え、
 片手かたてにこうもりを握にぎっていました。お母かあさんは、そのようすつき
 を見みると、我わが子この姿すがたを思おもい出だして、なんとなくいじらしくなつ
 て、あつい涙なみだがしらずにわいてくるのです。
 まだ、自分じぶんの子こだけが、帰かえつてきませんでした。お母かあさんの胸むね
 は、早鐘はやがねを打うつように、どきどきとしました。そして、改札かいさつ
 口ぐちのところまできて、階段かいだんを見上みあげて、いまか、いまかと待ま
 っていました。もう勤めつとから帰かえる人ひとは、たいてい帰かえつたとみえて、

その姿は絶すがたえてしましました。そして、電車でんしゃの着つくたびに降りおるものは、活動かつどうを見たみかえりのものか、盛り場さかばで酒さけを飲のんできて、酔よっぱらっているような人ひとたちでありました。その人ひとたちの数かずもだんだん少すくなくなつて、お母かあさんは、悲かなしくなつてきました。

「きよう、電車でんしゃに、なにか故障こしょうでもなかつたでしようか。」
と、たまらなくなつて、お母かあさんは駅えき員いんにたずねました。

「さあ、べつになかつたようですが。」と、駅えき員いんは簡かん単たんに答こたえました。

やがて時計とけいが、十一時半じはんになろうとしたときです。ゴウ、ゴウといつて新あらたに電車でんしゃがつくと、まもなく人ひと々びとが、ばらばらと階かい段だんへ降りおりてきました。そのなかに、肩かたをそびやかして、胸むねを

張り、元気な歩きつきで、階段を下りるとまっすぐに改札口へ向かつてきたのは、達夫でありました。お母さんは見ると走り寄りました。

「達夫、どうして、こんなにおそかったのだい。」

「おそくとも、心配しなくていいといったのに。」

「でも、もう十一時過ぎじゃないか。」

「お母さん、僕、夜業をしてきたんだよ。」

「まあ、夜まで働いては、おまえの体にさわるでしょう。」

母と子は、話しながら、とつくに店を閉めてしまって、暗くな

った、町の通りを歩いていきました。

「お母さんは、おまえ一人が、頼りなんだよ。おまえのからだは、

だいじ
大事なんだからね。」

「だいじようぶですよ、お母さん。そう心配するなら、明日から早く帰ります。」

「ああ、どうか、そうしておくれ。」

お母さんは、くらがりで、息子に気づかれないように、そつと涙をふきました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「夜の進軍喇叭」アルス

1940（昭和15）年4月

※表題は底本では、「夕焼《ゆうや》けがうすれて」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年8月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

夕焼けがうすれて

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>